

学部生へのライティング支援と大学院研究教育とを繋ぐ 卓越大学院試行プロジェクト

——書き手・チューター双方への学術的ライティング力養成支援に向けて——*

藤井 聖子

共同プロジェクト参加者：金沢じゅん 葛岡裕美 藤井美咲 藤永清乃¹

1. はじめに

本稿では、(外国語としての)英語のライティングセンターは開設し英語授業に直結する支援を活性化してきている一方、日本語のためのライティングセンターが(母語・第二言語いずれも)未だ開設していない日本の大学において、「仮設日本語ライティングセンター」を試行してきた卓越大学院構想プロジェクトの概要を報告する。とともに、大学院生 TA チューターによる学部生とのライティング・チュートリアル¹の意義に関して、大学院生にとっての意義、および、学部生にとっての意義、という双方の観点で分析し考察する。

前者は、学術的ライティング支援・教育の試行についての報告であり、本稿は所謂「実践報告」として資するものである。後者は、この教育実践の意義を、実践現場で得られたデータに基づき分析するものであり、さらに、試行してきている教育・研究プログラムが大学院生のための研究教育・支援を重要な目的としていることから、大学・大学院における教育実践を研究に橋渡しするアクション・リサーチの諸相を紹介するものである。

本卓越大学院試行プロジェクトには、2015年度・2016年度において、上記の大学院生が参与し、「仮設日本語ライティングセンター」でのライティング・チュートリアルにおけるチューターとして活躍し、談話分析など共同研究プロジェクトを行った。

以下、2章で、ライティングチュートリアル(そのセンター)に関する背景や理念を概観した上で、3章で、本プロジェクトで試行した学部生のためのライティングチュートリアル、および、それに伴う資料作成について概説する。4節5節は、本プロジェクトにおけるライティングチュートリアルに基づく談話分析研究の事例の概要である。その中から、とりわけ考察したい点として、大学院生 TA チューターによる学部生とのライティング・チュートリアル¹の意義に関して、学部生にとっての意義(6節)、および、大学院生チューターにとっての意義(7節)、という双方の観点で考察する。

*本プロジェクトの教育活動・研究は、所属研究科・専攻を通して配分された本校の卓越大学院試行プロジェクトからの支援によって実施可能になった。記して謝意を表す。

¹本稿の文責は著者にあるが、本稿で報告・紹介するライティング・チュートリアルとその談話分析は、ここに記す大学院生 TA の参与により進めてきている共同プロジェクトである。チューターとして学部生へのライティングチュートリアルを熱心に行った本プロジェクトメンバーに感謝する。種々のアンケートに応じてくださった協力者やチュートリアル参加者にも感謝する。

2. 背景

2.1 ライティング・センター

ライティング・センターは、文章を作成する過程で書き手それぞれの状況・ニーズに応じて、書き手の主体性を促しつつ書き手自身がライティングを深めより良くすることができるよう、対話により書き手を支援し導く教育活動を行う組織である。ライティング・チュートリアル（コンファランス）として、通常個別に対面での対話を書き手とチューターとが行う。書く過程での支援・指導を通して、引いては自立した書き手に導くことを目指す。このようなライティング・センターの理念に関して、North(1984)、佐渡島&太田(2013)等が詳しい。

アメリカでは、20世紀初旬からライティング・ラボ等として始動し、上述の理念でのライティングセンターが活性化し、殆どの大学に常設され日常的教育支援を行なっている（North(1984), Johnston, Cornwell, & Yoshida, H.(2010), Fujioka(2011), 等）。初等教育から高等教育まで続く母語でのライティングのための教育カリキュラムの重視が背景にあり、さらに、(母語での)ライティング力に関する研究の拡充・発展に繋がっている。一方、日本では、2000年代に、アメリカのライティング・センターをモデルとし理念を踏襲しつつ、先駆的大学に設置され始めた（Fujioka(2011)、佐渡島&太田(2013)等）。アメリカでは、母語（英語）でのライティングへの支援・指導を行っているが、日本では、外国語としての英語でのライティングの支援を中心的（または唯一の）対象としている場合が多く、学生の母語（日本語）でのライティングの支援・指導を含むライティング・センターを設けているのは、ごく限られた大学にとどまり、未だ多くはない。

2.2 本卓越大学院試行プロジェクトの学内背景

本試行を行った大学において、外国語としての英語のライティングセンター（Writers' Studio）が開設し、1年次の英語必修科目の授業の支援のために充実した指導を活発に実施してきている。一方、日本語のためのライティングセンターは、母語話者のためにも、第二言語として日本語で学び文章作成を行う留学生のためにも、いずれも未だ開設していないという学内背景である。

3. 本卓越大学院試行プロジェクトの実施・対象・資料

3.1 「仮設日本語ライティングセンター」の試み、ライティング・チュートリアルの実施

以上の状況を踏まえ、本プロジェクトにおいて、(i) 母語話者（日本人学部学生）、並びに、(ii) 第二言語として日本語で学び文章作成を行う留学生、それぞれのために、下記2種類のライティング・チュートリアルを実施してきた。

- (i) 4年次に（日本人学生が）母語日本語で執筆する卒業論文の支援のための継続的ライティングチュートリアル
- (ii) 初年次外国語「日本語」授業のアクティブ・ラーニングの一環で、読解・ディスカッション・意見構築等の教室活動から発展させた意見文執筆を支援する、留学生（日本語非母語話者）のためのライティング・チュートリアル

全て授業外活動として、希望者・ボランティアを募っての活動とした。活動内容は、前述のライティング・センターの理念を踏襲する「仮設日本語ライティングセンター」ではあるが、ライティング・センターの活動をする部屋やスタッフが確保されていないため、オープンハウス様式のライティング・センターとすることはできず、参加を希望する学部生とアポイントメントを取り、教員が大学院生 TA と学部生との連絡・コーディネーションをし、教室とは別の部屋をつど予約して、個別に大学院生 TA チューターがライティング・チュートリアルを行なった。

3.2 ライティング・チュートリアルにおけるチュートリアルの充実と分析のための資料

ライティング・チュートリアルを、書き手・チューターともに充実した活動とするために、以下を整えた。

- ・書き手へチュートリアル冒頭で尋ねる質問項目の作成
- ・ライティングチュートリアル前の草稿をチューターが読み、コメントの考察（授業担当教員も読み、フィードバック・コメントの比較検討）
- ・ライティング・チュートリアル後アンケート（加えて、母語話者にはインタビュー）
- ・任意同意者のチュートリアルセッションの録音・録画
- ・ライティングチュートリアル後の草稿

上記は、ライティングチュートリアルの談話分析のための資料でもある。

前出の (i) 4 年次母語で執筆する卒業論文の支援のためのライティングチュートリアル、および、(ii) 第二言語としての日本語での意見文執筆を支援する留学生のためのライティング・チュートリアルについて、上記資料（ライティングチュートリアル前後の草稿のテキスト分析、録画したチュートリアルの談話、書き手への事前・事後アンケート・インタビュー）に加えて、チューターへの事後アンケート・事後インタビューに基づき、4 節以降で提示する研究問題を中心に分析を行っている。

4. 本プロジェクトにおける談話分析研究の事例：(i) 第二言語としての日本語の場合

これまで、4 節・5 節で示すテーマを中心に、3.2 の資料に基づき、二種（4 節：第二言語としての日本語；5 節：母語日本語での卒業論文）のライティング・チュートリアルの談話の分析を行っている。

4.1 日本語学習者とのライティング・チュートリアルにおける対話の分析— 自立的ライティングを促すために—（金沢じゅん、藤井聖子、藤永清乃）

本研究では、留学生のための日本語意見文のライティング・チュートリアルにおける、学習者に対する対話の仕方・進め方に注目し、具体的にどのようなチューターの発話・発問・質問の仕方や談話の進め方が学習者の自立的ライティングを促すのかを分析した。

これまでの分析の結果、学習者の「自立」を促すためのチューターの対話の進め方としては、①チュートリアルの最初に書き手自身が感じている自分の意見文の問題点について尋ねること、②学習者自身に自分の意見文の文章構成を説明してもらうこと（口頭での説明に加え、テキストのプリントにマーキングをしてもらう）、③チュートリアルの最後に書き手が何を書き直そうと

思っているか尋ねること、④チューターが学習者の思考時間となる沈黙を受け入れること、⑤学習者の知識や能力を引き出すよう励ます発話、⑥書き手の発話を引き出す反応符（相槌を含む）が有効であることが分かった。

4.2 ライティング・チュートリアルにおける語用論的エラーと語用論的スタイルに関する対話的交渉（藤永清乃、藤井聖子）

母語でない言語で意見文を執筆する場合、語用論的に母語話者とは異なるテキスト構築方法や意味表出方法や構文・語彙の使い方等が生じ、ライティング・チュートリアルにおいて、その意図するところを書き手に尋ね、語ってもらって引き出すことがしばしばある。その際、母語話者スタンダードと異なる意味表出方法や構文・語彙の使い方を、「語用論的エラー」と捉えるのか、「書き手の語用論的スタイル」と捉えるのかは、読み手のみで判断できるものではなく、対話における表出意図・意味の交渉を通して明らかにしていくものである。ライティング・チュートリアルにおいて、このような表出意図・意味の交渉がいかに行われているかを分析し、語用論的エラーや語用論的スタイルを書き手とチューターとがともに見出して（修正すべきか温存すべきか等）対応を考案していくために、ライティング・チュートリアルにおける対話が不可欠であることを示した。

4.3 授業活動との連携で行うライティング・チュートリアルの役割・意義—第二言語としての日本語の場合（藤井聖子、藤永清乃、金沢じゅん）

初年次外国語必修科目「日本語」の授業でのアクティブ・ラーニングの一環で行ったライティング・チュートリアルを分析し、ライティング・チュートリアルの役割・意義を分析した。

外国語科目における指導は当然授業担当教師が行っているわけであるが、（授業担当教師に加えて）院生 TA による授業外でのライティングチュートリアルにどのような意義があるのかを明らかにすることを目的とした。本研究では、特に、授業で共通テキストの読解に基づきディスカッションを重ねた授業活動の延長で書いた意見文を、授業参与者ではない「読み手」（大学院生 TA チューター）に読んでもらい対話することが、テキスト構築における共有知識の前提化と明示化、知識の情報源や誰の意見かを明示することを学ぶプロセス、（脱）文脈化様相の異なる談話構築への気付きを促すこと、等に重要であり有意義であることを示した。

5. 本プロジェクトにおける談話分析研究の事例：(ii) 母語日本語での卒業論文執筆の支援

母語日本語での卒業論文執筆支援のためのライティングチュートリアルの談話分析としては、以下の問題に焦点を当ててきている。

5.1 卒業論文執筆支援のために行った継続的ライティング・チュートリアルの縦断的事例分析（藤井美咲、藤井聖子、葛岡裕美）

本研究では、日本語で卒業論文を執筆している日本語母語話者の大学四年生と修士・博士課程大学院生との継続的ライティング・チュートリアルを縦断的に分析し、継続してチュートリアルという他者と対話をする機会を得ることによって、書き手及びチューターのチュートリアル中の

発話について、どのような変化が起きているかを示す。その際、チュートリアルに持ち込まれた原稿とチュートリアル後の改稿も合わせて分析した。最初は、チューターが書き手に対して情報の足りない箇所に関して発問していたが、最終的に、書き手は自分からわかりにくいのではないかと思われる箇所についてチューターに質問することがあった。これは、書き手による「他者の視点」の意識化によるものと考えられる。また、チューターの発問は、具体的な方策を示すよりも、書き手に考えさせるように変化した。

5.2 卒業論文執筆事例の談話分析 —ライティングチュートリアルにおける沈黙の意義— (葛岡裕美、藤井聖子、藤井美咲)

ライティング・チュートリアルでは、チューターは書き手の成長を支援する立場でさまざまな方略を用いる。本研究は、そのなかでも特に沈黙 (silence/pause) に焦点を当てた。日本語での卒業論文執筆を題材とした日本語母語話者同士のチュートリアルセッション談話を分析することで、そのコンテキスト特有の沈黙の特徴、意義を示した。さらに沈黙が“scaffolding”(Wood et al., (1976)), “hinting”(Hume et al., (1996))として効果的に機能しうる際の特徴を探究し、(i) チューターによる発問等が沈黙を誘発すること、(ii) 沈黙の後には喚起された問題点に関してライターが気づいたこと、すなわち問題に対する解決案や自らがこれから取る対処等が提示されることを示した。

5.3 卒業論文執筆のためのチュートリアルの意義 (藤井聖子、葛岡裕美、藤井美咲)

卒業論文の指導は、当然指導教員が論文指導を行うわけであるが、指導教員による論文指導に加えて、院生 TA がライティング・チュートリアルを行うことにどのような意義があるのか、また、外国語授業での学生への指導は当然授業担当教師が行っているわけであるが、(教師に加えて) 院生 TA による授業外でのライティングチュートリアルにどのような意義があるのかを明らかにすることを主な目的とする。さらに、それら大学院生 TA のライティング・チューターとしての体験を、いかに大学院生自身の論文執筆過程の客観的洞察力・思考伝達力・論文執筆力養成に繋げることができるかを、チュートリアル実践を通して分析してきている。

この観点での分析に関して、これまでに得られた分析結果を、以下 6 節 7 章で述べる。

6. 卒業論文執筆のためのライティング・チュートリアルの役割・意義

本節では、(日本語を母語とする学部生が) 4 年次に母語日本語で執筆する卒業論文執筆の支援のために行ったライティング・チュートリアル (パイロット事例) を通して、その役割・意義を考察する。²

² ライティング・センターやライティング・チュートリアルの役割や目的に関する一般的な検討・総説については、Fujioka (2011), 佐渡島 & 太田 (2013), Yoshida, Johnson & Cornwell (2010), Wood (1976) 等に優れた考察・論述がある。本稿では、これら先行研究における知見に示唆を受けリエゾンしつつ、特に 6 章 6.1 項、および 7 章 7.2 項で述べる考察点に着目する。

6.1 考察したい点、R.Q.

卒業論文の指導は、当然指導教員が論文指導を行うわけであるが、指導教員による論文指導に加えて、院生 TA がライティング・チュートリアルを行うことにどのような意義があるのだろうか。

6.2 卒業論文学部生 アンケートより

卒業論文執筆のためのライティング・チュートリアルに参加した学部生に行ったアンケートにおいて、以下の質問（自由記述回答）をしたところ、下記のような回答があった。

卒業論文学部生より（アンケート質問）

卒業論文を書く上で、どのようなサポートを（誰から）受けましたか？
それらによってどのようなサポートを受けたと考えていますか？

卒業論文執筆の学部生より（アンケート回答）

指導教員には、まず自分の興味を、卒論として十分な内容になるように研究の大きな方向づけをしていただき、その後、論文を書き始める前に必要な作業、考えのまとめ方を教えていただきました。論文の執筆に入ってから、構成と形式的なルールについてアドバイスをいただき、自分の論文を書く上での弱み（言葉足らずで相手に伝わる文章になっていない傾向があること）もご指摘いただきました。

卒業論文執筆の学部生より（アンケート回答）

ライティングチュートリアルでは、より細かいレベルで指導していただきました。具体的には、書いてきたパートの文言の修正を行ったり、新たに出てきた考えるべき問題を整理するために話し相手になっていただいたのも助けになりました。気持ちの面でも、定期的にライティング・チュートリアルがあることは、論文執筆のペースメーカーにもなりました。些細なことでも気軽に質問できる環境なので助かりました。

6.3 大学院生チューターとのライティングチュートリアルの役割

前項で示した卒業論文執筆の学部生からの感想の一例は、ライティング・チュートリアルでのチューターとの対話が、指導教員との対話とは異なる補完的支援になっている（と感じられた）ことを示している。

指導教員が学部生一人一人と卒業論文指導の面談をする際、研究デザインや分析方法・分析内容・論述内容等に関する内容的指導や助言が、学生からの期待を含め関与する両者の心持ちにおいて優先することが多い。学生からのアイディアや考察を引き出すための発問や対話を繰り返し行いながら、それに基づいて研究・論文執筆を進めるための構想を共に構築し、見直し・道筋を示すことが多い。さらに、次に行うべきことを助言することが多い。時には、見直すべき問題や修正すべき点がある場合それを指摘し、再考に向けての助言をすることもある。学生からの期待・要請・感じ方としても、研究を進める上での助言や導きを期待し求めている傾向がインタ

ビューから伺える。

一方、大学院生チューターとのライティング・チュートリアルは、内容面、および、チュートリアル対話の進め方において異なる。以下、談話を分析する中で明らかになった主な2点を述べる。

6.3.1 テキスト構築における背景知識の明示化や(脱)文脈化

一つ目の違いは、チューターは（その分野の当該論文テーマに必ずしも背景知識を備えているわけではない）「読み手」として、書き手である卒論学部生から話を聞き、草稿を読み、純粋に分からない点を尋ね、書き手である卒論学部生は、その当該論文テーマのエキスパートとして応じ説明をしていることである。他方、卒業論文指導の指導教員とは、卒業論文執筆開始前に既に、論文のテーマ探しや構想のためのディスカッションを繰り返し行い、そのための先行研究や理論等の参考文献の提示・説明を受け、共に研究構想を組み立て、デザインを組み立てるためのディスカッションを重ねてきている。その論文の構想に関して、ある意味共同構築者であり、その背景・前提知識など既に殆どの内容を共有済みである。それら前提知識や論文構築協働経験を共有する論文指導者ではない「読み手」（チューター）に読んでもらい対話することが、論文というテキスト構築における背景知識の明示化の必要性や(脱)文脈化の様相の異なるテキスト構築への気付きを促すために有益であることが、チュートリアル対話やアンケートの分析から分かる。

指導教員との対話の中でも、無論、問いかけ「発問」をしつつテキスト構築を行う。しかし、チュートリアル対話におけるチューターからの問いかけは、「発問」に限らず、実は純粋に「質問」であることも多く、書き手からも、純粋な「質問」として受けとめやすい。このように背景知識を共有しない「読み手」チューターとの対話が、論文テキスト構築に必要な、背景知識の明示化の必要性や(脱)文脈化の様相の理解に寄与している。

6.3.2 「書き手」の思考を促すための対話の進め方 — 「沈黙」確保の意義

二つ目の違いは、対話の中でどれほど自然に通常より長い「沈黙」が頻繁に可能になるかという点においてである。

ライティングチュートリアルの対話の談話分析の中で、どのような対話を書き手の思考を促し書き手の支援になるかを分析している。その中で、対話における「沈黙」時間の十分な確保が、極めて重要であることが分かる。「沈黙」は、第二言語としての日本語でのライティング支援のためのチュートリアルにおいても（4節の4.1参照）、母語での卒業論文執筆支援のためのチュートリアルにおいても（5節の5.2参照）重要な分析対象としてきた。両チュートリアルで、日常生活の対話場面では通常生じることが稀な長時間に渡る「沈黙」が観察されている。

特に、「沈黙」に焦点を当てた「卒業論文執筆事例の談話分析 —ライティングチュートリアルにおける沈黙の意義—（葛岡裕美、他）」（5.2参照）において、「沈黙」の前後に何が起こっているかを分析した。「沈黙」が、書き手の思考を促し、ライティングにおける糸口や突破口を自ら見出すために寄与していることが観察できる。

一方、指導教員が学部生一人一人と卒業論文指導の面談をする際、学生からのアイデアや考

察を引き出すための対話をめざす面談などにおいて、卒論学生に、発問を投げかけてから、暫く返答がない場合（教員自らが自身に「沈黙」確保の大切さを再確認しつつ）じっと沈黙を保って待つことも多いが、沈黙継続が不自然な場合、次回への検討事項としたり指導教員から救い船の発話をすることもあるだろう。チューターとのライティング・チュートリアルに見られるほどに頻繁に長い沈黙を保つことは（学生の気持ちを含め）不自然で、多くの場合なかなか現実的でないだろう。この点でも、ピアでも指導者でもない大学院生チューターによるライティング・チュートリアルの特徴が見出せる。

7. 大学院生チューターにとってのチューター体験の意義

本節では、大学院生チューターにとっての意義について考察する。

7.1 本プロジェクトの構想・目標

学部生へのライティング支援充実の試みと連携する本卓越大学院試行プロジェクトは、学部生のみでなく大学院生への学び体験を支援するものであり、(i) 学部生への学術的ライティング力養成に資することを旨とするとともに、(ii) ライティング・チュートリアル体験、および、その談話分析共同研究の協働体験から、大学院生の教育者・研究者育成に資することを旨とする。

7.2 考察したい点、R.Q.

大学院生チューターにとって、チューターとしてのライティングチュートリアル体験がどのような意義をもつのかについて、検討・考察したい。

7.3 役割反転学習 —ライティングチュートリアルと論文指導との類似性

経験則として、博士論文指導にせよ、修士論文指導にせよ、卒業論文指導にせよ、論文指導において指導教員が学生に行っている支援・指導（の少なくとも一部）は、趣旨・目的・ニーズ・方法などにおいて、ライティング・チュートリアルにおいてチューターが書き手に対して行っていることと類似する。（6節においては、その内容や対話の進め方において、院生チューターによるライティング・チュートリアル独自の意義は何なのかを明らかにするために異なる点を検討したが、目的・趣旨や方法の大局的かつ基本的なところは、類似性が大きい。）

ただし、大学院生が、一方で自らの主たる目標である博士論文・修士論文の研究・執筆に取り組むことと、他方でチューターとして他者のライティングの支援をする立場で対話することとは、大学院生の役割が（tutee ⇄ tutor 間で）反転している。すなわち、これら二つの営みは、自らの役割が反転しているだけであり、対話を通して思考を促し論文の構想構築や執筆を支援する談話に参加し体験することは同様である。その目的・趣旨や談話構造も類似している。

そこで考察したいのが、思考支援・執筆支援の機会・コンテキストに自らの役割が反転した立場で参与する能動的体験により、大学院生自らのライティングへの取り組みや心構えやメタ知識にどのような影響があるのかという点である。

学習理論における「学習のピラミッド Learning Pyramid」「体験のコーン Cone of Experience」(Dale (1946), (1969) 等) において、「他者を教える Teach others」体験や、「目的のある直接体験

Direct Purposeful Experiences」が高次の学習に有益であることが示されてきている。これらの理論に基づき、ライティングチュートリアルにおいてチューターとして「他者を教える」「目的の明確な直接体験」が学びに有益である、という作業仮説が可能である。

果たして、役割反転学習がライティングにおいても功を奏するのだろうか。

7.4 大学院生チューター アンケート回答より：チューター体験から感じたこと・学んだこと

大学院生チューターの方々に、「ライティングチュートリアルでのチューターとしての体験から何を感じ何を学んだか、自分が論文を執筆する際に何を思い出すと思うか」尋ねた。大学院生チューターよりの一部の回答を以下内容別に示す。7.4.1 以降のヘッダーに要点を示す考察・学びが、チューターによるチュートリアル体験の振り返りから伺える。

7.4.1 ライティングプロセスについてのメタ学習・メタ知見の明確化

- ・知識では知っていたことが、チュートリアルでチューターとして、他人の文章をなんらかの対話、コメントをするために読むことによって、明白になったと思われる。
- ・引用については自分も気をつけようと思った。
- ・ライティング・チュートリアルを通して自分が変化したと特に思われることは、自分の文章を客観的に見なくてはならないという意識の向上である。以前からも、レポートなどを提出前に読み返す際、客観的に見て情報が足りないところがあるのではないかなどは気にするようにはしていたが、チュートリアルで実際に他人の文章を読んでもみると、当人が思っている以上に説明しないと背景知識の共有されていない読者には理解が難しいことがあるということが実感できた。
- ・推敲の重要性を実感することができた。一回しかチュートリアルを行えなかった場合でも、以前の文章よりはわかりやすくなっていると感じられた。推敲が重要であることは、学部のときから言われてはいたが、実行するのはスケジューリングなどにより難しかった。今回、推敲の重要性を実感することができ、一回書いて終わりにしないようにしようと考えた。
- ・レポートなどでは、締め切り間近になってからだと、焦ってしまって客観的に読むことが難しくなるので、できるだけ早く終わらせて、時間を置いてから推敲をしたほうがよいのだと思った。
- ・修士論文では、普段のレポート、また卒業論文よりも長い文章を書くこととなる。その時に気をつけたいことは、構成をしっかりとすることである。

7.4.2 ライティングのための思考を促す対話、ライティングのための思考の間主観化の体験

- ・「文法を直してください」といって最初もってくるが、結局のおとしどころは、「論の組み立て方」とか「リサーチクエスチョンのたてかた」になることが多い。
- ・特に、リサーチクエスチョンのたてかたについて、「こうです」といって正解を示せるものではないので、ライティングチュートリアルではあるが、紙をベースにゴリゴリ書くよりも、口頭で議論を重ねあっていく感じになり、お互いに知恵をかしあっていくプロセスなので、チューターとしては議論に没頭する一方で、一步俯瞰して全体を把握したりするメタ認識も必要だし、自分が今後、論文や博士論文を書くために、よくわからないけどなにかしらのトレーニングになっていると思う。

7.4.3 ライティングのためのメタ知見：母語話者と非母語学習者との共通点

- ・日本語非母語の学習者だから理解がおそいとおもっていたことが、実は日本人の学部生からもよく聞く悩みとして共通していることがわかった。例：引用
- ・「日本語の難しさ」と「学術的な文章を書く難しさ」は違うとわかった。後者は日本人・日本語母語話者でも直面する問題だ。

7.4.4 ライティング・テキスト構築を分析する視点

- ・私は意見文の研究をしているが、チューターを通して意見文の研究の重要性に改めて感じた。文章の研究を通して、学習者が上手に文章を書くことができる方法を見つけたいと思った。
- ・マクロ的な文章構成と文法や表現のミスはつながりがあるのかもしれないと思った。つまり、文章構成がしっかりしていれば（直れば）文法や表現のミスも軽減する？

7.4.5 教養・異文化・異言語へのまなざしとその楽しみ

- ・意見文のチューターを通して様々な国の文化や習慣をたくさん学ぶことができて面白かった。
- ・日々接することの少ない日本語学習者とたくさんかかわることができたのは、日本語教育に関心がある私にとって非常に新鮮だった。
- ・相手の文化や、考え方について、日本人同士のチュートリアルよりもより濃密に話し、学ぶことができた。
- ・学部一年生がもってくるトピックはさまざまで、毎回教養を学んでいるようなつもりで楽しかった。

7.4.6 心構え・励み・情緒

- ・gradeをあたえる先生でもない、チューターという存在がいかに気楽で話しやすいか、話せてアドバイスをもらえる存在がいかにありがたいかを学生さんたちから何度か聞いた。
- ・修士論文を書いているときに、せっぱつまっている中でもTutorをしていたのは、学部一年生の論文をみて、彼らの論文を馬鹿にしているわけではないけど、“I've come this far”としみじみ思ったりしたその気持ちのためであった。
- ・自分が将来teaching positionについて教えることができたなら、きっと大勢を前にして、しかもいささかの威厳をもっているであろうので、TAとして学生と身近に接して学生さんたちから教えてもらったことを忘れないようにしたい。

7.4.7 役割反転学習：チュートリアルを受けた体験からの学び、チューターの立場への転移

- ・今回卒論チュートリアルを行うにあたって、昨年度自分が卒論を書いているときにどのようなチュートリアルが役に立ったと思われるかを考え、可能であれば実行を試みた。
- ・何が役に立ったかと考えると、段落の趣旨が不明瞭であるような場合や、最初にどのようなことを書いたかをチューターに説明するなどである。

以上のような振り返りのコメントから、大学院生チューターが、学部生へのライティングチュートリアルを行う活動を通して、ライティングプロセスについてのメタ知識を体験から身に

つけ、他者の文章をチューターとしての役割で対話・コメントをするために能動的に読むことによって、知識では知っていたことを明確化していることが分かる。また、ライティングのための思考を促す対話の意義を無意識のうちに感じ取っていることも分かる。さらに、ライティングに取り組む心構え・情緒面でも、役割反転から様々な励みや目標を感じている。

7.4.7のコメントにあるように、(前年度卒業論文執筆時に)チュートリアルを受けた体験から、チュートリアルでのライティング支援・指導において何が役立つかという好ましい手法に気づき、チューターとしてライティング支援・指導をする反転役割に転移していることも分かる。

7.5 プレファカルティ・ディベロプメント

チューターとしての体験が、プレファカルティ・ディベロプメントに寄与することも本卓越大学院試行プロジェクトの目指すところである。その成果のほどは、現時点では直接的に判断することはできない。が、「7.4.6 心構え・励み・情緒」の最後のコメント項目に、チューターとしての体験を将来ファカルティになった際に生かしたいとする心構えが表れている。また、前項7.4.7「役割反転学習：チュートリアルを受けた体験からの学び、チューターの立場への転移」で確認したように、チュートリアルを受けた体験からの気づき・学びを、チューターとしてライティング支援・指導をする反転役割に転移していることから、役割として同じ側の立場であるチューター体験から将来のファカルティとしての教育活動への転移が、十分期待できる。

8. おわりに

本稿では、学部生へのライティング支援充実の試みと連携する卓越大学院構想プロジェクトとして実施してきた (i) 4年次に(日本人学生が)母語日本語で執筆する卒業論文の支援のための継続的ライティング・チュートリアル、および、(ii) 第二言語としての日本語の授業の一環で、教室活動から発展させた意見文執筆を支援する、留学生(日本語非母語話者)のためのライティング・チュートリアルについて報告し、大学院生 TA チューターによる学部生とのライティング・チュートリアルの意義に関して、大学院生にとっての意義、および、学部生にとっての意義、という双方の観点で考察した。

さらに、大学院生チューターによる学部生とのライティング・チュートリアルに伴って行っている談話分析研究の概要を述べた。試行してきている教育・研究プログラムが大学院生のための研究教育・支援を重要な目的としていることから、大学・大学院における教育実践を研究に橋渡しするアクション・リサーチの事例となれば幸いである。

日本語でのライティング支援のためのライティング・センターが(母語・第二言語いずれも)未だ開設していない大学において手探り・手作りの「仮設日本語ライティングセンター」を試行するにあたり、種々困難な点も多く、謙虚な評価は不可欠である。その試行と評価を、本稿で提示した視点、とりわけ「書き手・チューター双方への学術的ライティング力養成支援にいかに関与するのか」という観点での研究問題として捉え、実践的談話分析を通して模索してきた。大学院生・学部生・ファカルティの皆様からのご意見・ご評価を仰ぐためのきっかけになれば幸いである。

参考文献

- Dale, Edgar. *Audio-Visual Methods in Teaching*, 3rded., Holt, Rinehart & Winston, New York, (1969). (The Dryden Press, 1946.)
- Fujioka, M. (2011). アメリカのライティングセンターにおける理論と実践：日本の大学ライティングセンターへの示唆. 近畿大学教養・外国語教育センター紀要. 外国語編, 2(1), 205-224.
- Hume, G., Michael, J., Rovick, A., & Evens, M. (1996). Hinting as a tactic in one-on-one tutoring. *The Journal of the Learning Sciences*, 5, 23-48.
- Johnston, S., Cornwell, S., Yoshida, H. (2010). Writing centers in Japan. 大阪女学院大学紀要. 5. 181-192.
- North, S. M. (1984). *The Idea of a Writing Center*. College English. 5. 46: 433-446.
- 太田裕子, & 佐渡島紗織. (2012). 「自立した書き手」を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識—早稲田大学における実践事例とPAC分析. In *Waseda Global Forum* (p. 237).
- 佐渡島紗織 (2009). 「自立した書き手を育てる—対話による書き直し—」『国語科教育』68, 11-18.
- 佐渡島紗織 & 太田裕子. (2013). 文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み. ひつじ書房.
- Yoshida, H., Johnston, S., & Cornwell, S. (2010). 「大学ライティング・センターに関する考察—その役割と目的」[Reports on university writing centers-their roles and purposes]. *Osaka Keidai Ronshu*, 61(3), 99-109.
- Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G.(1976). The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17, 89-100.

本プロジェクトのこれまでの成果

- 金沢じゅん, 藤井聖子, 藤永清乃 (2016). 「日本語学習者とのライティング・チュートリアルにおける対話の分析—自立的ライティングを促すために—」The Eighth Symposium on Writing Centers in Asia.
- Fujinaga, Kiyono & Seiko Fujii. (2016). Negotiating Pragmatic Meanings and Cultural Presuppositions in Writing Tutorials: Errors or Styles? The Eighth Symposium on Writing Centers in Asia.
- 藤井聖子, 藤永清乃, 金沢じゅん (2016). 「授業活動との連携で行うライティング・チュートリアルの役割・意義—第二言語としての日本語の場合—」The Eighth Symposium on Writing Centers in Asia.
- Fujinaga, Kiyono & Seiko Fujii. (2016). Negotiating Pragmatics of Student's Writing through Tutorials: A case study for exploring World Japaneses. The Tenth International Language for Specific Purposes Seminar. University Teknologi Malaysia, Kuala Lumpur.
- 葛岡 裕美・藤井 聖子・藤井 美咲 (2017). 「ライティングチュートリアルにおける沈黙の意義—卒業論文執筆事例の談話分析—」The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia.
- 藤井 美咲・藤井 聖子・葛岡 裕美 (2017). 「卒業論文執筆支援のために行った継続的ライティング・チュートリアルの縦断的事例分析」The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia. 2017.3
- 藤井 聖子・葛岡 裕美・藤井 美咲 (2017). 「学部生へのライティング支援充実の試みと連携する卓越大学院構想プロジェクト—チューター・ライター双方への学究的ライティング力養成に向けて—」The Ninth Symposium on Writing Centers in Asia.
- Fujinaga, Kiyono & Seiko Fujii. (2017). Negotiating Pragmatics of Student's Writing through Tutorials: A case study for exploring World Japaneses. *Language for special purposes: Insights and Innovations*, 9 (4-2). 75-80.